

昼間観光客で溢れかえっていたホームも、今はまばらな人たちを電灯が煌々と照らすばかりで閑散としている。向こう側のホームに入ってきた電車は昼間の四両から二両に減らされていたが、それでも立っている客はほとんど見当たらない。

私の前に母親とその両側に二人の子どもが並んで立っている。妹は五歳くらいか、相当疲れたのだろう、体をくの字にして母親にな垂れ掛かるようにしている。兄の方は七、八歳か、電車が来る方向をじつと注視している。母親は両方の手を二人の肩にそつと掛け、ときおり娘にそして息子が見ているほうに顔を向ける。白いうなじとわずかに見える横顔から清楚感がそしてゆったりとした母親の優しさが伝わってくる。

やがて電車が入ってきた。妹は降り客が済むのが待ちきれないように我先にと飛び乗ると、三人分の席を確保しようと両手をいっぱい広げて座席に這いつくばった。そんなことをせずとも座席はいくらも余裕があった。兄は『こまったやつだ』と言わんばかりの表情をしながら母親の分の間を空けて座った。私は三人の真ん前に座った。正面に顔を向けた母親はやはり色白く清楚で美しい女性だった。子どもたちは自分のリュックを膝に載せ母親もそして私もリュックを膝に載せた。

母親とチラッと視線が合った。私はいけないことをしでかした幼児のように思わず目を下に逸らしてしまった。その後母親が微笑んでいたかもしれない。私はおもむろにリュックから本と眼鏡を取り出すと、できるだけ本の位置が高くなるようにリュックの上に立てた。そして活字を追うような素振りをしつつ眼鏡の上から三人を観察した。

妹は見るからに遊ぶのが大好きといった感じで、表情や振舞いから生きていることが楽しくてしょうがないといった気分が伝わってくる。兄は眼鏡こそ掛けていないがその顔つきから、レベルの高い私立の学校へ通っているであろうこと、十分な学力と分別を併せ持つであろうことが一目で分かる。時折辺りに視線を泳がせ、一瞬私に対して留まるのだが意に介した様子は少しもなく、疲れて眠そうではあるが簡単には寝そうにない。

母親は自分の持てる多くを息子に引き継いだ感じだ（そしてある特異な部分を娘に）。知性と女性的な優しさを併せ持つ瞳と、思慮深さを感じさせるすつと伸びる細い鼻筋。そして軽く張って結んだ唇は仄かな妖艶を漂わす。この顔からは大笑いすることも泣き喚くことも連想するのは難しい。思わず足を止めて見入りたくなる絵画のように、じつといつまでも見ていたくなるそんな容姿だ。

「いるかさんおそらとんだね」、「ビューンて?」、「びゅーんて」。  
「いるかさんおそらとんだね」、「ビューンて?」、「びゅーんて」。

子と母が繰り返す。

母親が頭を突き上げるように「ビューンて?」と言うと、娘は頭の上に両腕で三角を作り、立ち上がりながら「びゅーんて」と言う。そしてそのたびに顔中が満足そうな笑いでいっぱいになる。あたりにかすかな笑いが起き、私も笑った。母親が顔を上げて正面の私と目が合った。私が笑う顔を見て、母親も安堵したかのように結んだ口元と瞳で笑顔になる。

「いるかさんおそらとんだね」、「ビューンて?」、「びゅーんて」。

ケイコちゃんが麻疹に罹って死んだのは五歳の夏だった。そのとき僕は七歳だった。ケイコちゃんは隣の家の娘であまり外には出ず僕が唯一の遊び相手だった。僕の家遊びに来るようになって数ヶ月ほどで死んでしまった。ケイコちゃんはいつも母親が作ったらしい人形を大事そうに抱えていた。手垢で顔は汚らしく黒ずみ、毛糸の髪の毛は不揃いに縮れていた。ケイコちゃんは「はい、だっこしていいよ」とその人形を僕に差し出した。それは僕に対して気を許していることの証だった。僕の家には女の子が喜びそうなものは何もなくなかった。ケイコちゃんはビー玉もメンコもすぐに飽きたし、ゴムボールも楽しめなかった。ボールをうまく追えないのだ。ケイコちゃんが一番喜んだのは、「まさかりかっぴだキンタロウ、クマにまたがりおうまのけいこ」の、『けいこ』をわざとアクセントをつけて大きな声を出して歌うときだ。ケイコちゃんはそれにげらげら笑って喜んだ。最初のうちは僕も面白がって繰り返したが、何度も何度も飽きもせずむのにはさすがに辟易して、仕方なくケイコちゃんを四つ這いの背に乗せ「はいしどおどお、はいどおどお」と歌いながら部屋中を回った。

ある晩、ケイコちゃんのお父さんが怒鳴り込んできた。怒りの矛先は僕だった。

「おたくの・・・」、「うちの娘にヒワイな・・・」。

『ヒワイ』の意味は分からなかったが、女の子に対して何かしでかすことかくらいは感じた。あとから母から「ケイコちゃんに何かしたか?尻に痣ができてたって」と言われ、やはりそうかと思っただ。尻の痣でケイコちゃんのお父さんが何を想像したのかは分からない。僕は母に、「はしやぎすぎて馬から落ちてちやぶ台の角にぶつけて泣いたと話したが、母は「そんなことか。まったくあの父親は・・・」とそれっきりで済ませてしまった。

その一件の少し後、ケイコちゃんと家の前で遊んでいるとき、ケイコちゃんは「おしっこ」と言って僕のほうに向かってスカートを

まくり上げパンツを下ろした。そして切羽詰ったケイコちゃんは家にあがる余裕もなく始めてしまった。僕は『何も悪いことはしていない』と思いつつも、周りが気になる罪悪感を抱きつつやたら長く続く光景にじっと耐え続けた。自分とはまったく違う初めて見る女の子の体はとても衝撃的だった。

そんなことが続けてあって、僕はケイコちゃんが単なる妹のようなかわいさだけではなく、女の子としてかわいく感じるようになっていった。ケイコちゃんは僕と違ってピンク色の肌をしていて、特にほんのり膨らんだ頬はいつもてかてか光っていた。ケイコちゃんはあるまじりうまくしゃべることができず、やることも喜び方も普通の子とは違っていた。とにかく楽しんで嬉んだりできることがなにより好きだった。ケイコちゃんは体つきも顔つきも特徴的だった。でも僕はケイコちゃんがかわいくてとても好きだった。ケイコちゃんと一緒にいるときが一番楽しかった。

ケイコちゃんが不思議な能力をもっているのを目撃したことがある。ケイコちゃんは花が好きで、道端に咲いた雑草の花でもしゃがみ込んでいつまでも飽きずに見続けた。そしてあるときケイコちゃんが花の近くに手を伸ばすとその指先に蝶がとまった。蝶もケイコちゃんも全く当たり前のことのようにじっとしていた。僕はあつげにとられてその光景を眺めていたが、「ケイコちゃん」と小さく声を掛けてそっと近づくと蝶は飛んで行ってしまった。ケイコちゃんは「ちようちよさん、バイバイ」とニコニコしながら、空高く舞い上がっていく白い蝶に声を掛けた。

ケイコちゃんが死んで何年かしたころ、僕の住む町から電車ですばらく走った大きな町で異様な体験をした。母と人通りの多い商店街を歩いていると、少し先を母親に手を引かれてケイコちゃんそっくりな後ろ姿の女の子が歩いていった。僕は思わず駆け出して二人を追い越し、疑われない距離をとった先から振り向いた。顔つきもケイコちゃんそっくりだった。僕はすれちがいの通行人を装って二人に近づいた。よく似ていたが勿論ケイコちゃんではなく母親も違う人だった。どうしてあんなに体つきや顔つきの特徴がよく似た子がいるのか、僕にはとても不思議に思えてならなかった。

（私がダウン症のことを知り、ケイコちゃんがそうだったというのを分かり得たのは大人になってからだ。）

僕がケイコちゃんの家遊びに行つたことは一度もない。ケイコちゃんのお父さんがいつも家にいたからだ。あとから思つたことだが、あのお父さんは物書きだったのかもしれない。お母さんとは何度か話をした。みかんやお菓子をもらったこともある。「ケイコと遊んでくれてありがとね」と言われた記憶もある。僕の母と違って物静かで外で見かけることが少ない人だった。



を意味するのか、自身の頭が勝手に描いたはずなのになかなか読み取れなかった。しかし時を経て小さい頃の記憶をあれやこれやよみがえらせているうちに『せいぼさま』に行き当たった。そして少しずつ私にはその光景の意味が分かっていった。

二人は林の中で虫を追っている。だが本当に探しているのは蟬でもトンボでもなく女の子のお母さんだ。たった五年間しか一緒にいることが出来なかったお母さんに会いたがる女の子と、それに付き添った少年の私が探し歩く。しかし私の記憶の中の『せいぼさま』はなかなかきちんとした像を結ぶことはなかった。

そうしてもう長いことこの画像が私の脳裏に自然と浮かび上がることもなく、意図的に描き出すこともしなかった。しかし忘れてしまったというわけではない。その気になりさえすれば軽く目を閉じていつでもかつてのままに描き出すことは出来る。

母親は軽く目を閉じたまま少しうつむき加減になっている。私はその姿をしぼし鑑賞しやはり三人と同じようにそっと目を閉じた。林の中の白黒の二人の子どもがかつてと変わらないままに浮かび上がる。ケイコちゃんのお母さんを二人で探し歩く……。ところが私は不意にあることに思い当たった。私は無意識の中で浮かび上がった画像の意味を、これまでまったく読み違えていたことに気付いたのだ。少年は女の子の手を引いてお母さんを探し歩いていると決め付けていたが、そうではなかった。女の子の方が少年を導こうとしているのだ。少年につまり私に女の子が何かを伝えようとしているのだ。どうして今の今までこのことに気付かなかったのだろう。五歳で死んでいった女の子が私に何か大事なことを伝えようとしていたなんて……。

いっしょか電車は海から離れ民家の軒先を走っていた。三人の背後を家明かりや街灯が流れ、時折間延びした踏切の警報の音が聞こえてくる。

私はたっただいま思いついたことを誰かに出来れば目の前の母親に話したい衝動に駆られた。

兄もすっかり眠っていた。母親は目を閉じ相変わらず穏やかな表情をしていた。しかし眠ってはいない。私は本を閉じ、三人を眺め続けた。

私はいつしか眠ってしまった。目を開けると母親が二人を起こしにかかっている。電車は終点の駅に近づいていた。女の子は恨めしそうに母親を見上げ愚図り出す寸前のような顔をしていた。私と目が合い笑顔を送ると、口をへの字にした怖い顔が返ってきた。私は思わず吹き出しリュックを手にして立ち上がった。